課程博士

博士学位論文審査結果報告書

氏 名 （ 本 籍 ）	篠原　俊明（長野県）
学 位 の 種 類	博士(体育科学)
学 位 記 番 号	甲第 128 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 15 日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第 4 条第 1 項 該当
学 位 論 文 題 目	「体つくりの運動遊び」に関する指導資料の提案:教員の困り事を踏まえて
審 査 員	主査　日本体育大学　教授　野井　真吾
	副査　日本体育大学　教授　岡出　美則
	副査　日本体育大学　教授　鈴川　一宏

《論文審査結果の要旨》

子どもの体力・運動能力は 1985 年をピークに低下傾向を示し，今日においても低い水準で停滞しているといわれている．また，このような問題の本質は，体力ではなく運動能力の低下にあるとも考えられている．このような状況を受けて，2008 年以降の小学校学習指導要領では，従前高学年のみの実施であった体つくり運動がすべての学年で取り扱われている．ところが，体つくり運動系のうち，「体ほぐしの運動」は固有の運動がないこと，「多様な動きをつくる運動（遊び)」は実施内容に偏りがあることが指摘されている．また，教員自身も，体つくり運動系を指導しにくいと感じ，困り事を認知しているとの報告もある．元来，体つくり運動系は，学年や内容構成によって目的やねらいが異なる．そのため，教員が指導に対して抱く困り事やニーズはそれぞれの内容構成で異なると考えられる．また，体育部への所属や体育主任経験，研究会への参加が教員の困り事やニーズに影響を及ぼすとの指摘を踏まえると，教員の体育に関する専門性の程度によって内容構成ごとの指導に対する教員の意識に差異が生じることも予想される．

以上のような問題意識の下，本学位論文では教員の体育に関する専門性の違いから，体つくり運動における内容構成ごとの指導に対する困り事やニーズといった教員の意識を明らかにするとともに，それらの困り事や課題に対応した体つくり運動系の授業を支援する資料を作成し，その有用性について検討した上で，教員を支援する指導資料として提案することを目的とした．

第 1 章（研究課題 1）では，小学校低・中学年の体つくり運動系の「体ほぐしの運動（遊び)」と「多様な動きをつくる運動（遊び)」の指導に対する意識を体育に関する専門性の違いから検討することを目的とした．調査では，東京都内の小学校教員 271 名を対象に，2021 年 11 月から 2022 年 2 月の期間に Google フォームを用いたアンケート調査を実施した．その結果，体育の専門性が高くない教員の特徴として，内容構成の別を問わず，「単元計画の作成」「授業の流し方」「運動師範」といった授業構想から授業実践までのすべての過程で困り事の認知が高いこと，行政作成資料や官製および民間研究会が作成する資料を使用しない傾向にあること，「多様な動きをつくる運動（遊び)」のうち，「体を移動する運動（遊び)」以外で取り上げにくいと考える動きが多いこと等が確認された．一方，副読本や体育に関する知識が豊富な先生への相談は，体育の専門性にかかわらず，同程度行っていることも確認された．

続く第 2 章（研究課題 2）の目的は，「体つくりの運動遊び　多様な動きをつくる運動遊び」の授業の学年，施設，同一単元計画の使用といった授業の前提条件を統制した上で，体育に関する専門性が高い教員（熟練体育教員）と体育部に所属せず体育主任経験がないといった体育に関する専門性が高くない教員

課程博士

（一般教員）の授業の特徴を確認することであった．その結果，熟練体育教員と一般教員の運動学習場面の時間には有意差が認められなかった一方で，学習指導場面の時間，出現頻度は熟練体育教員の授業が，マネジメント場面の時間，出現頻度は一般教員の授業が，身体活動量は一般教員クラスの男女の SB，熟練体育教員クラスの男女の MVPA が，フープ回しで観察した基本的な動きの習得状況は熟練体育教員クラスの男子がそれぞれ有意に高値を示した．これらの結果を受けて，一般教員の「体つくりの運動遊び　多様な動きをつくる運動遊び」の授業を支援する際には，学習指導場面の確保やマネジメント場面を減少させる方略，身体活動量の増進，基本的な動きの習得に関する支援が必要であることが示唆された．

第 1 章，第 2 章の結果を踏まえて行われた第 3 章（研究課題 3）では，「体つくり運動遊び　多様な動きをつくる運動遊び」の指導資料を作成，それに基づく授業を一般教員が実施した上で，その有用性を検討することを目的とした．その結果，学習指導場面は介入教員の時間が長く，マネジメント場面の時間は熟練体育教員と介入教員との差が認められず，MVPA は介入教員が有意に高値を示した．一方，フープ回しの習得状況は，熟練体育教員クラスの方が単元後の動作得点が有意に高値を示すことも確認された．以上のことから，本研究で作成した指導資料は，学習指導場面の確保とマネジメント場面の時間の減少，MVPA の確保に寄与する可能性があるものの，フープ回しの習得という学習成果という観点では課題があることも確認された．

審査では，調査方法や得られた結果，さらには本学位論文を踏まえた今後の研究展望等に関する質疑に対して，いずれも的確に応答する様子を確認することができた．また，本学位論文が心配されている日本の子どもの運動能力や動きの習得を目指した体つくり運動系の授業の創造という点で重要な研究知見を提供しているだけでなく，教員の実感と実態を踏まえて，教員の特性に応じた指導資料を作成し，その効果を検証するという一連の研究手法を意識して研究課題に真摯に向き合っていることが高く評価された．さらに，教育現場でのフィールド調査には，調査校や対象者との信頼関係が不可欠である．その点，種々の研究会等への参加を通して現場教員との信頼関係を構築し，調査を企画，実行した上で，得られた研究知見を学術論文にまとめ上げるとともに，調査校にもその成果をフィードバックするという一連の作業は，申請者が自らの力で研究を立案，遂行，解析，解釈，公表するという研究者としての力量を十分に兼ね備えている証であることも確認された．一方で，審査員の指摘を踏まえた再検討による軽微な修正が必要であることも確認されたが，全般的には各審査員の質疑に対して，的確かつ真摯に応答する様子が確認できた．

以上のことから，審査員全員の一致を持って，篠原俊明氏が博士（体育科学）の学位を授与されるに十分な学力と見識を有しているとの判断に至った．

《最終試験結果》

合格・　不合格

令和 6 年 1 月 10 日

日本体育大学大学院体育科学研究科